

『西鶴諸国はなし』における女性像

齋藤優香

「キーワード：①西鶴 ②女性 ③感情 ④行動 ⑤文学史」

はじめに

『西鶴諸国はなし』は、貞享二年（一六八五）に刊行された、井原西鶴による怪異短編集である。五卷三十話にわたって、多種多様な物語が綴られている。

この作品の序文は、「世間の広き事、国々を見めぐりて、はなしの種をもとめぬ」と始まる。つづいて諸国に存在する伝説上の怪異が列挙され、温泉の中に泳ぐ魚、閻魔王の巾着など、不可思議で非日常を感じさせるものが並ぶ。いかにも怪異小説らしい序文だが、その結びはいささか奇妙である。これまで伝説上の物事を挙げていたにもかかわらず、その最後に「都の嵯峨に、四十一迄大振袖の女あり」というのだ。そして西鶴は「これをおもふに、人はばけもの、世にないものはなし」と序文を締めくくる。

実際に当時「四十一迄大振袖の女」が街中に存在していたのか、確かめる術はない。しかし「これをおもふに」とある以上、西鶴がこのような女の姿を実際に目にし、驚いたことは事実であるだろう。確かに、年齢にそぐわない格好をした女の姿は珍しく異様であるが、なぜ西鶴はそれを「人はばけもの」と表現したのであるうか。

本稿は改めて「人はばけもの」という言葉に込められた意味を追うため、『西鶴諸国はなし』所収の五つの話を考察するものである。序文に登場する「四十一迄大振袖の女」をはじめ、この作品には印象的な活躍をする女性が多く描かれている。女性というひとつの軸を通して各話を見ていくことで、女性をきっかけに「人はばけもの」と言った西鶴の意図について考えてみたい。そのうえで、文学史における『西鶴諸国はなし』の位置づけを試みる。

一、〈感情〉を〈行動〉に変える女性たち

『西鶴諸国はなし』において特に女性が印象的に描かれている五話のうち、まずは三話について考えたい。詳細は後述するが、この章で挙げる作品の女性たちは皆、〈感情〉を強く持ち、それを糧にして大胆な行動をとっている。この力がすなわち、『西鶴諸国はなし』の女性の持つ力ではないかという考えのもと、まずは一話ずつの特徴を捉えていきたい。

一 ― 一、卷二の三「水筋のぬけ道」

卷二の三「水筋のぬけ道」は、次のような話である。

若狭の越後屋に奉公するひさという女性は、商人の庄吉という男と恋仲になり、結婚の約束をしていた。それを見とがめた奉公先の女房は、美貌があるから男性と通じたのだと責め、火箸でひさの頬を傷つけた。ひさは失意から海に身を投げた。その死骸は水筋を通り大和の秋志野まで届いて、人々を驚かせた。ひさの胸には守り袋があり、善光寺如来の像、書置き、数珠が入っていた。それを聞いた庄吉は秋志野まで足を運び、ひさの埋まった塚の前で眠った。すると夢の中に、火車に乗るひさと女房が現れた。ひさは女房の顔に焼金を当て、「今こそ思いを晴らしてやる」と言った。同じころ若狭で、女房が叫び声をあげて死んだという。

この一編には多数の先行研究が存在する。まず井上敏幸氏は、ひさが復讐を遂げられた要因として、ひさが流れ着いた秋志野という土地から、秋篠寺の阿伽井にまつわる「太元帥明王化現の故事」とかかわりがあるとした。⁽¹⁾

ほかにも宮本祐規子氏は、ひさが善光寺如来像を持っていたことは、善光寺に女人救済のイメージがあることと関連し、復讐を遂げられた要因のひとつであると述べた。⁽²⁾

このように本作はこれまで、話に登場する様々なモチーフと、ひさの報復との関連性に注目されてきた。本稿ではそれらの先行研究をふまえ、ひさが抱いた動機や、報復の仕方について考えたい。

まず、ひさが復讐において男性の力を一切借りていないことに注目する。女性が恨みを持つ相手に報復することは古典作品の中でもよく見られるが、そういった場合、女性は身近な男性に直接的な行動を依頼することが多い。大川信子氏は本話に寛文元年（一六六一）刊『因果物語』の影響が見られるとし、『因果物語』に収録される数話を取り上げた。⁽³⁾ その中でも特に深い関連があると論じた、卷一の八「妾を妬て、夫に怨をなしけ

る、女房の事」は、夫の妾を恨む女房が手代の男に命じて妾を殺害させる話である。また『西鶴諸国はなし』巻二の五「夢路の風車」でも、姉妹の霊が主人公である奉行の夢に登場し、自分たちを殺した男への報復を依頼している。したがってこの二作品には、女性が男性の力を借りて復讐を遂げるといふ話の型が活きているようだ。

『因果物語』と「夢路の風車」はどちらも女性の報復譚で、特に「夢路の風車」は、男性の見る夢の中で女性の霊が復讐を遂げる点が「水筋のぬけ道」と共通し、関連性が高い。しかし「水筋のぬけ道」には、先述した話の型は見られない。

『因果物語』や「夢路の風車」と比較すると、ひさや女房の行動は特異である。大きな商家をまとめる女房の周りには、自身の命令を聞く男性が多数存在すると想像できるが、女房は自分自身でひさを折檻した。また、ひさは死してなお、自分で恨みを晴らす道を選んだ。加えて言えば、本話では商家の主人やひさの恋人の庄吉という、事件と深い関わりを持つはずの男性でさえ、その姿は限りなく薄められている。主人は登場もせず、庄吉はひさの復讐の場面を夢に見る以外、大事な場面での役割は与えられていない。このような男性の排除、言い換えれば女性性の強化は、死後のひさを見ていく中でも表れてくる。

ひさの死骸は水脈を通して秋志野までたどり着く。櫛名田姫や松浦佐用姫の例のように、水は古くから女性と関連の深いモチーフである。また、先に挙げた宮本氏の論⁽⁴⁾にあるように、ひさが身に着けていた如来像も女性救済の寺として有名な善光寺のものであった。つまり本話は、一貫して女性だけの報復譚が成り立っているのである。

女房はひさを折檻する際、「形、人並なるがゆゑに、いたづらをするなれば目の前に思ひしらせん」と言い、

頬に火箸を押し当てた。対してひさは、女房の頬に焼金を押し当て「今ぞ思ひを晴らしけるぞ」と言う。自分がされた仕打ちを、そっくりそのままやり返しているのだ。厳密にはひさは女房に殺されたのではなく、頬を傷つけられたことで美しさを失い、それに絶望して自ら死を選んだ。したがって、ひさの恨みは〈美しさを奪われた〉ことにある。だからこそ女房に同じことをやり返し、今度は女房の美しさを奪い、同じ絶望を味わわせようとしたのだ。つまり本話における女性同士の争いの中心にあるのは〈美しさ〉なのである。

先に挙げた男性の力を借りた報復譚では、恨みの動機に男性がかかわっていた。しかし本話の二人の動機には、男性の姿はない。ひさが恋人をつくったというきっかけはあるが、女房はひさの美貌そのものに嫉妬したのであるし、ひさも女房に美貌を奪われたことに強い恨みを抱いた。二人が抱く〈美しさ〉への強い感情は、女性特有のものである。また水脈も善光寺も、女性に力を与えるモチーフであった。

こうして一貫して報復から男性が排除されているのは、〈美しさ〉という女性だけが持つ問題に対し、女性が必要としないことを示しているのではないだろうか。〈美しさ〉という問題に関して、男性は介入を許されていないのだ。これは、美しさを失ったひさが「女の身にしては、このかなしさ、大方乱気になって」、庄吉に愛されていることを慰めとせず、「世にながらへても、せんなし」と自殺をしたことから明らかであろう。たとえ恋人がいようと、「女の身」にとって、〈美しさ〉をなくすことは耐え難い苦しみだったのである。

西鶴はこの一編において、〈美しさ〉を女性だけの問題とし、女性同士の一对一の争いを描いたのである。

一―二、卷四の二「忍び扇の長歌」

卷四の二「忍び扇の長歌」は、次のような話である。

上野にて、下級武士の醜い男が大名の美しい姪に恋をした。男が姫の屋敷で奉公するうち、姫も男を愛するようになった。姫は「私を連れて逃げてほしい」と男に長歌を書いた扇を贈り、二人は駆け落ちした。その後慎ましく暮らしていたが、半年後に見つかり、男は処刑された。姫は切腹を迫られるが、「女が一人の男を持つことは不義ではない。また身分の低い相手と結婚することは、昔から例があることである」と主張し、亡き男のために髪を下ろした。

この一編は数多くの先行研究で、典拠について論じられてきた。金井寅之助氏が「矢都姫事件」という天和元年（一六八一）の实在の事件をもとにしていると述べたほか、宗政五十緒氏が『更級日記』の「竹芝寺縁起譚」が典拠であると論じたことを基盤として、その後も多数の典拠説がある。しかし本稿では、身分差のある男女の恋愛は普遍的なモチーフであると考え、典拠の明確化は行わない。そのうえで、先行研究で注目されてきたもうひとつの要素、姫の不義に対する主張について改めて整理して考えたい。

姫は男に、長歌を書いた扇で駆け落ちの誘いをした。古典の世界において恋に歌は不可欠である。しかし時代は近世、それも相手は下級武士であり、歌を通して心を通わせるという行為は現実味がなく思える。この長歌を重友氏は「異常な方法」とし、これによって作品に「一段の滑稽味が盛られて、読者の共笑が求められている」と述べる。身分の低い男に対し、上級階級のやり方で求愛するという行動がちぐはぐで、そこに笑いが生まれるというのだ。つまり場違いな「長歌」は、身分違いの恋を描いたがゆえに生まれる、独自性のあるユーモアなのだ。そして同時に姫の考え、性格をも表しているであろう。

身分違いという型破りな恋をしながら、その方法はあくまで古典的、伝統的というところに、彼女の伝統を大切にする価値観が感じられる。姫の中には伝統的な価値観と、自分の恋を成就させようという強い意志の両方が共存しているのだ。

また駆け落ちした後の暮らしにも、同じようなちぐはぐな行動が見て取れる。慎ましい生活の中で姫は洗濯に勤しむのだが、本文に「手なれたまはぬ、すぎせんだく、見る目もいたはしく」とあるように、これまでしたこともない家事に苦勞しているようだ。この場面の挿絵について、井上敏幸氏は「姫君の姿は、零落はれた生活をしいられている人としては、すこし美し過ぎるといわねばならない」と述べた⁹⁾。洗濯と高貴な身なりという組み合わせは、先の長歌と通じるものがある。下級武士への愛の告白に長歌を用いる滑稽さと、そぐわない格好で洗濯をする滑稽さ、二つが本話の中で対応する構造になっているのだ。伝統的な価値観を持つ本来の姫の立場なら、洗濯をはじめとした家事をするはずがない。つまり、古来の「雅」を大事にしていた姫は、男と暮らすことで「俗」な人間へと転化したのである。自分の低い相手にまで雅な方法で求愛した姫が、その男のために俗な行動をとる、その落差こそが本話の魅力ではないだろうか。

ではここまでをふまえ、姫が最後に主張した内容を確認したい。周りに不義を責められた姫は、「夫ある女の、外に男を思ひ、または死に別れて、後夫を求むるこそ、不義とは申すべし」、「又下々を取りあげ、縁を組みし事は、むかしよいためしあり」と主張し、「我すこしも不義にはあらず」と言った。つまり、一生に一人の男と結婚することこそ正しく、身分差のある恋は古くから存在するから不義ではないというのだ。

先行研究において、姫のこの意見は一つのものとして扱われ、既存の価値観に異を唱える挑戦的なものとして評価されてきた¹⁰⁾。しかしこの主張には、実は二つの相反する価値観が共存している。それは、再婚を許さな

い〈女の一生に一人の男〉と、身分差の關係ない〈自由恋愛〉という二つの意見である。

当時の再婚は、堀切実氏が詳細に論じたように、町人、武家ともに珍しいことではなかった。夫に先立たれた場合のほかにも、相性やその他の理由から離縁し、新たな縁を求めることも頻繁にあったという。そういった状況の中での〈女の一生に一人の男〉は、古い理想論であり、当代にふさわしいものではなかっただろう。いわば中世的な、一つ前の価値観なのである。

では〈自由恋愛〉はどうであろうか。先行研究のいくつかにおいて姫の発言が進歩的と評されたのは、この部分が要因である。自分よりはるかに身分の低い男と結婚することは中世的な規範からすれば新しく、挑戦的な行動であった。しかし姫は本来、古い価値観を大事にしているはずだ。にもかかわらずここでは、自分の正当性を主張している。これは、身分の低い男を愛してしまった自分を正当化するため、苦し紛れに生み出された論理なのではないだろうか。

苦し紛れとは、いったいどういうことか。本来中世的な価値観を持つ姫にとって男との恋愛は、自分の価値観が揺らいでしまいそうな危機であった。そこで姫は、「下々を取りあげ、縁を組みし事は、むかしよりためしあり」という理屈で、自分の本来の価値観と〈自由恋愛〉とを両立させることにした。中世以前の例を手本にしたという理由をつければ、姫の中世的な価値観は揺らがないで済む。しかしそういった結婚の例は英雄譚などにおける特殊なものであり、実際には不義でないことを説明する材料には足りていない。したがって、姫の主張は矛盾を孕んでおり、それが姫の内面の葛藤を表しているのである。

この葛藤は、先に述べた長歌と洗濯の対比にも象徴的に描かれている。これまで大事にしてきた中世的な価値観を、無理やり俗で近世的なものに転化させるほどに、姫の男への思いの強さを感じさせられる。

「忍び扇の長歌」は矛盾を孕む彼女の主張を通し、中世から近世に移り変わる時代の中で、当時の女性たちが葛藤し、複雑な価値観を持ちながら生きていたことを表した一編であるだろう。

一―三、卷五の四「闇の手がた」

卷五の四「闇の手がた」は、次のような話である。

越後の今川采女は故郷で殺人を犯し、逃げることになった。そのとき馴染みを重ねた女に連れて行ってほしいと懇願され、采女は仕方なく女を連れていく。道中、野のはずれの一軒家に宿泊した。一方、木曾の赤鬼と呼ばれる暴れ者は仲間「旅人が連れる女に一目惚れをした。何としても思いを遂げたい」と涙ながらに訴えた。その夜、木曾の赤鬼たちは采女たちの宿泊する一軒家に押し入り、家中の者を縄で縛り、女に乱暴を働いた。采女と女は奉行に訴えるが、「手掛かりがないから調べられない」と言われる。すると女は「私に思うところがあるので、この宿場中の男を皆集めてください」と言った。男たちが集まると、女は「この中に、背中に鍋炭の手形がついた者がいるはずですよ」と言い、調べると、犯人である十八人が明らかとなり、死刑となった。慌ただしい中でよくとっさに手形をつけたと、女は知恵を褒められた。その後、采女と女はこれまでの困果応報だとし、刺し違えて死んだ。

本話の典拠について井上敏幸氏によると、大筋は『今昔物語集』卷二十九の二十三「妻ヲ具シテ丹波ノ国ニ行シ男大江山ニシテ縛ラレタル語」から、女が手形をつけるという展開は馮夢竜著の『知囊』卷の十・察智部詰奸に見える「僧寺ニ子ヲ求ム」から用いたという⁽¹²⁾。どちらも本話の舞台設定とよく似通っており、典拠と考えて良いだろう。本稿ではそれを受けたくうえで、本話の印象的な冒頭文に注目したい。

「闇の手がた」の冒頭は「美女は身の敵と、むかしより申伝へし。おもひあたる事ぞかし」という一文である。つまり、男性にとって美女は敵であるというのだ。この言葉に注目し、「闇の手がた」における男性から見た女性の影響について考察したい。

まず主人公の采女にとって、共に旅をする女はどのような存在なのだろうか。采女は人を殺した罪人である。親類はおらず、逃げるのに都合の良い身の上であったが、馴染みの女が一人いた。このことは本文で「親類のなき事、かやうの時の、よろこびなりにしに、なげきあり。此二とせあまり、あいなれし女、此別れをかなしみ、何国迄もと、袖にすがれば、是非なくつれて」と書かれる。

女が「なげき」とされているのが、留意したい点である。「是非なくつれて」とあるから、采女は本来女を連れていく気はなかったことが窺える。逃亡の際のリスクを減らすために身軽な行動をしたかったにもかかわらず、いわば余計な「荷物」を抱えることになったのだ。女は采女にとって、言葉は悪いが、足手まといと言える存在だったのでないだろうか。「なげき」という言葉には、そのような否定的な意味が込められているように思う。

そうして女を連れて逃げたことで、采女は思いがけない災難に遭うことになる。女に一目惚れした木曾の赤鬼に暴行を受けたのである。赤鬼たちは何も盗まず、目的はあくまで女であった。つまり逆に言えば、女さえいなければこのような行動に出ることはなかったのだ。采女の立場になってみれば、ただでさえ足手まといに思っていた女のせいで、実際に大きな被害を被ったことになる。

さらには最後、采女と女は「是迄の因果」と、刺し違えて死ぬ。こうして被害に遭ったのは今までの罪の因果応報だと思えば、死ぬ道を選んだのだ。「是迄」とは、具体的には采女が犯した殺人の罪のことだろう。その

罪が、木曾の赤鬼による事件という形で返ってきたと悲観したので。つまり二人は事件に遭ったことが原因で、死ぬ決意をしたのである。人知れず逃げ切ろうとしていた采女は、女に運命を狂わされたといっても過言ではないだろう。

また、木曾の赤鬼にとっても似たようなことがいえるだろう。木曾の赤鬼は女を一目見て恋に落ち、「命に替ても」、女を自分のものにしたと事件を起こした。身勝手な解釈をすれば、女が美しかったせいで木曾の赤鬼は罪を犯すことになり、最終的には死ぬこととなったのである。「命に替ても」と言ったことが現実となってしまうのだ。木曾の赤鬼の立場になってみれば、「命に替て」とまで思わされてしまった女こそ、死の原因であり「身の敵」だったと言えるだろう。

采女と木曾の赤鬼、二人の男性の目線から本話の物語を追うと、事件に関して二人は被害者と加害者という正反対の立場であるが、その立場に陥った原因はどちらも女にあることがわかった。「闇の手がた」は、男性にとっての女性という脅威を語っているのである。

またそれに加え、女性の対抗心や感情も描いている。女が美しさだけでなく、頭脳で男性を翻弄したことに注目したい。暗闇の中でとっさに背中に鍋炭の手形を付けたことで、女は木曾の赤鬼たちに報いることができた。この手形は、典拠にはなかった女性の抵抗の証である。これは木曾の赤鬼にとっても、采女にとっても想定外のことであった。特に木曾の赤鬼にとって、この証はまさに自分の命を失う原因となった。西鶴は女性の美しさだけでなく、機転の利く賢さも男性の脅威になるということを描いたのである。それが本話の独自性であり、当代女性の強さがよく表れている。

男性にとって女性は想定外の出来事を起こす得体のしれない存在であることが、「美女は〈男の〉身の敵」

という言葉に込められているのである。西鶴の人間に対する広く深い視野が、よく反映された作品と言えるだろう。

一四、〈感情〉を〈行動〉に変える女性の力

これまで見てきた三作品の女性の行動に注目すると、いずれも女性の〈感情〉が強く描かれていることがわかる。

「水筋のぬけ道」には、ひさと女房の持つ〈美しさ〉への感情が描かれた。特にひさの行動は非常に力強い。「忍び扇の長歌」には、中世的な価値観が残る近世当時の、理想と現実との間で揺れ動く女性の感情がリアルに描かれていた。たとえ価値観を曲げてでも相手への思いを貫こうとする、姫の強い感情や意志が表れている。

「闇の手がた」は、男性にとっての女性の恐ろしさを「美女は身の敵」という言葉で集約したものであった。女には名前も与えられず、一見すると主体性がないように思えるが、この女の行動にも強い感情が見える。彼女は木曾の赤鬼に襲われた際、されるがままになるのではなく、反抗心から背中にも手形を付けた。それを奉行に申し出、見事に犯人を暴く姿は頼もしく、彼女の賢さと反抗心の強さが見える。

以上三話に登場する女性は、特定の感情を強く抱き、その感情を原動力に自分自身で行動を起こしている。この女性たちの強さは、〈感情〉を〈行動〉に変えられることだ。また注目すべきなのは、その感情の多様さである。

「水筋のぬけ道」のひさは、美しさへのこだわりやプライドから、恨みという感情を持った。「忍び扇の長

歌」の姫は、想定外の恋を半ば無理やりに正当化するほど、相手を受する感情を持っていった。「闇の手がた」の女には、男性からの暴行に屈せずに、知恵を働かせる反抗心があった。

このように『西鶴諸国はなし』では、女性が様々な感情を持ち、それぞれがその感情を糧に自分で行動にうつすさまが描かれる。同じように女性が主体的に動く西鶴の作品として、ほかに『好色五人女』がある。しかしこの作品の女性たちは、お七が吉三郎を恋焦がれる思いから火事を起こしたように、多くは男性への恋慕の感情が行動の動機であった。それに対し、『西鶴諸国はなし』の女性たちは多様な感情を抱いている。

特に興味深いのは、「水筋のぬけ道」のひさである。繰り返しになるが、彼女は〈美しさ〉という女性だけの問題のために自ら死を選び、のちに復讐を果たした。『好色五人女』の各話の主人公や「忍び扇の長歌」の姫が抱いたのは男性に恋する感情だったのに対し、ひさは女房という同じ女性に対して強い感情を持った。恋人に頼ろうとせずに自殺をしたことから、恋人への思いよりも女房へも恨みの方が勝っているとも思える。女性が同じ女性に対し、男性の介入なくしてこれほどまでに強い感情を向けるさまを描いたのは、非常に鋭い視点なのではないだろうか。また、ひさの感情を描くにあたって、怪異譚というかたちも効果的に響いている。火車に乗り女房を傷つける復讐をするひさは恐ろしく、女性の持つ感情の強さを、より凄みを持って伝えることに成功している。この話は当代女性の持つ感情と、怪異とを組み合わせて、その思いの強さを強調したものと考えられる。

したがって以上の三話は、女性の多様な感情を西鶴の鋭い視点で切り取ったものであった。その中で、〈感情〉を〈行動〉に変える女性の力が一貫して表れているのである。

しかし同時に、『西鶴諸国はなし』各話に描かれた感情は多様なものではありながら、いずれも男性が少な

からず関係したものであることも指摘しておきたい。恋する気持ちではなくとも、「闇の手がた」は男性への反抗心であるし、ひさも恋人をもったことが折檻されるきっかけであった。完全に女性だけの人間関係や事件は、近世当時には発想されづらかったのだろう。基本的に男性主体の社会において、女性を描く際には男性のかかわりが不可欠だったことは、やはり前提として考えるべきである。

二、女性の力——「紫女」・「見せぬ所は女大工」

前章で、女性には〈感情〉を〈行動〉に変える力があり、各話の中でそれが描かれたことを論じた。ではほかの女性が活躍する話には、その力は表れているのだろうか。この章では二つの話を扱う。

二——、卷三の四「紫女」

卷三の四「紫女」は、次のような話である。

筑前国に、山奥で暮らす遁世者の伊織という男がいた。あるとき、伊織のもとに紫色の着物を着た美しい女性が現れた。女に誘惑された伊織は、それまでの志を忘れて契り、夜ごとに二人は逢瀬するようになった。しかし次第に伊織は衰弱し、懇意の医師に見咎められる。医師は伊織の話聞き「その女は世にいう紫女に違いない。紫女は人の血を吸い、命を奪った例もある」と、彼女を斬るように言った。正気に戻った伊織はその夜、紫女を斬りつける。女は洞穴へ逃げ去り、その後姿を現したが、国中の修行者が集まって弔うと消えた。伊織は危うい命を助かったのであった。

「紫女」の典拠は、寛文八年（一六六六）刊の浅井了意著『伽婢子』巻三の三「牡丹灯籠」であるとされる。話の類似性からこの作品が典拠で間違いないだろうが、井上敏幸氏はこのような怪異譚は「どこにでも転がっている」とし、例に『伽婢子』の敷話を類話として挙げた。¹³ 本稿ではその類話をもとに、「紫女」固有の特徴を探りたい。

井上氏が挙げた類話は、「牡丹灯籠」のほか、巻二の三「狐の妖怪」、巻七の四「中有魂形化契（ちううのたましいかたちけしてちぎる）」、巻七の五「死亦契（しよてまたちぎる）」、巻十の三「祈て幽霊に契る」の五話である。いずれも〈男が幽霊もしくは狐と契る〉という筋が共通している。

この中で「紫女」だけに見られた特徴がひとつある。それは主人公が遁世者という点である。『伽婢子』各話の主人公は、それぞれに細かな違いはあるが、いずれも普通の生活を送り、女性と契ることは禁忌ではなかった。しかし「紫女」の伊織は、自らを律し女性との関わりを絶っている男性であった。その徹底した様子は、本文に「磯くさき風をも嫌」うとあるほどで、伊織にとって女性との交流は禁忌であったと言えるだろう。実際に、伊織が紫女の誘惑に陥落した場面には「年月の心ざしを忘れ」と書かれる。

また伊織は医者紫女の正体を知らされた際、「おろかなる心を取りなほし、いかにもく、しるべしもなき、美女の通ふはおそろし」と言う。この「おろかなる心」という言葉は伊織が女の誘惑に乗り禁忌を犯した心を示すのであるが、これもまた、伊織が遁世者であるからこそ生まれた言葉である。

したがってそれまでの類話ではありふれた筋だった話を、「紫女」は男を遁世者に設定することで、禁欲生活を送る男でさえ惑わされてしまう女の恐ろしさを描く新しい話に展開したので。

本話は前項で述べた三話とは異なり、仮名草子『伽婢子』の敷話とよく似通っており、女性の細かな感情は

描かれていない。そのため、先述した女性の〈感情〉を〈行動〉に変える力を大筋から見出すのは難しい。しかし、本話の紫女の行動には浮世草子らしい要素が加わっており、その点に女性の力が隠されている。

紫女は伊織に対し、あからさまな誘惑を仕掛けていた。「牡丹灯籠」をはじめとする類話では、霊の女性の美しさに男性が惹かれるという筋はあるが、女性からの積極的な誘惑は見られない。それに対し、押し入るようにして伊織の家に入り、寝転がって自ら服を乱す紫女の姿は、好色物に登場する女性たちをも彷彿とさせる。その描写には西鶴の作品らしい、男の滑稽さがよく表れている。この点には井上氏も言及し、本話ではそれまでの類話とは違って「幽霊がエロティックな悪ふざけでもって描かれている」とし、これを仮名草子と浮世草子の違いであるとして、「西鶴の豊かな連想力と確呼たる構成力」の表れだと述べた。⁽¹⁴⁾

この話のもうひとつの独自性は、幽霊もしくは妖怪である女性に、まるで生きている当代女性のような態度をとらせたことにあるのだ。西鶴の同時期の作品『好色五人女』や『好色一代女』という好色物のような表現を、仮名草子らしい怪異譚と組み合わせることが面白い。全体としては仮名草子のような男性主体の話になっているが、紫女が伊織と契るといふ目的のために強引に誘惑する姿には、女性主体の要素が認められるのではないだろうか。仮名草子と浮世草子、両方の特徴がある点が、「紫女」の魅力であるように思う。

このように紫女の行動からは、伊織と契るといふ意思の強さと、それを叶えようと行動にうつす力を感じ取れる。「水筋のぬけ道」や「忍び扇の長歌」ほど明確ではないが、これは先に述べた、〈感情〉を〈行動〉に変える女性の力の表れではないだろうか。

つづいて、巻一の二「見せぬ所は女大工」について論じる。あらすじは次の通りである。

一条小反橋に大工の女がいた。ある秋、この女大工は御所に呼ばれ、部屋を壊すよう命じられた。理由を聞くと、名月の夜に天井から四つ手の女が腹這いで現れ、奥さまに近づいたという。奥さまは夢の中で背骨に釘を打ち込まれる思いをしたと話すが、その身体には何事もなく、ただ畳に血が流れていた。安倍の左近という者に占わせると、「この部屋の中に災いの元がある」という。そこで女大工が呼ばれ、部屋を壊して調べるということであった。女大工が最後に御祈禱の札を外すと、七枚下に屋守が釘にとじられたまま生きていた。それを煙にしてしまうと、それからは何事もなかったという。

「見せぬ所は女大工」の典拠は多くの先行研究により、概ね明らかにされている。まず典拠とされたのは、後藤興善氏⁽¹⁵⁾、江本裕氏が指摘した『古今著聞集』「魚虫禽獸」の「渡辺の薬師堂にて大蛇釘付られて六十余年生きたる事」と、「撰津国ふきやの下女昼寝せしに大蛇落懸かる事」の二編である。次に、宗政五十緒氏が寛文十年（一六七〇）刊『醍醐随筆』における類話を新たに挙げた。

典拠のほとんどは「生き物が釘に刺されたまま生きていた」という点で「見せぬ所は女大工」と共通するが、その中で女大工が登場するのは本話のみである。西鶴はなぜ、「女大工」という特殊な職業を創作したのだろうか。

前提として、女大工は当時実在しなかったと思われる。その根拠に本文では「都は広く、男の細工人もあるに、何とて女を雇けるぞ」と疑問が投げかけられ、「されば御所方の奥つぼね……すこしの事に男は吟味もむつかしく、是に仰せ付られる」と答えが述べられる。ここでは、読者が当然感じるであろう疑問を自ら提示し、それに答えることで、実在しない職業の女性がいることに説得力を持たせているのである。

実在しないはずの女大工は、本話の中でどのような意味を持つのだろうか。先行研究では、その住まいである一条戻り橋から渡辺綱の鬼退治説話が連想され、女大工の英雄性について論じられている。宮澤昭恵氏は、「市井に住む風変わりな女というだけでは、見頭わしの力が足りない。そこで、一条戻り橋を住まいとすることで綱説話のイメージを利用し、英雄の面影を吸い上げて女に付与する。女はより強大な力を背景に持つことで怪異を見頭わし」たとする。冒頭に一条戻り橋の名が出ている以上、それによって彼女に英雄らしさが付与されているのは確かだろう。しかし彼女が英雄たる理由は、それだけではないように思う。

古典文学における英雄譚の主人公には、何かしらの能力が備わっていることが多い。それは一寸法師のように小さい身体であったり、依藤太のように弓の名手であることだったり様々だが、それをここでは「特殊能力」と呼んでみたい。英雄にはそれぞれ固有の特殊能力があり、それを活かして相手を倒すというのが英雄譚の型である。

これを女大工に照らしあわせてみる。女大工は男性にはできない仕事を、女性であるという理由で受け持っている。女性だから男子禁制の御所への出入りができ、その中でも特に警備の厳重な奥さまの寝所で釘を打つことができるのだ。もし女大工が男性であれば、御所に入れず、怪異を倒すこともできない。つまり、彼女の「女」という性別は特殊能力であり、それを活かして相手を倒すという構造が成り立つのだ。

また、女大工は最初に「中びくなる女房」とある以外、女性らしい外見描写はされていない。怪異に悲鳴を上げた奥さまとは対照的に、恐れることなく祈念札を外してヤモリを焼いてしまう大胆さは、英雄たる男性の姿に近い。これまで扱った四編の女性が皆美女として描かれたのに対し女大工だけが醜いのも、彼女の男性性を強調するものと言える。つまり女大工は本質的には男性であり、怪異を倒す「特殊能力」として、女性と

いう性別を付与されたのである。ただの大工の男性では英雄たる要素に欠け、怪異を倒すには至らない。大工を英雄にするため戻り橋という住まいも要素として付与されているが、それ以上に〈女〉という性別こそ、彼女の大きな〈特殊能力〉だろう。

女大工が本質的には男性であるために、本話にはこれまで述べてきたような〈感情〉を〈行動〉に変える女性の力は見られない。しかし、こうして〈女〉という性別を〈特殊能力〉に用いたことこそ、西鶴が女性の持つ力を実感していた証なのではないだろうか。西鶴は女性に何かしらの力を感じていて、それをキャラクター作りに利用したと考えられるのではないだろうか。

「紫女」は男性にとつての女性の脅威を語るものであったが、女性の能動的な行動が印象深かった。また、「見せぬ所は女大工」の女大工は、その特徴から女性らしさは見られないものの、かえって西鶴が女性に特別な能力を感じていたことが読みとれた。したがって、直接的な方法ではないが「紫女」および「見せぬ所は女大工」にも女性の持つ力が隠されているのである。

三、『西鶴諸国はなし』の位置づけ

『西鶴諸国はなし』は全体として怪異短編集であるが、実際に収録されている作品には怪異的要素のないものも少なくない。本稿で扱った五話にも、怪異譚なものと同様でないものの両方があった。「水筋のぬけ道」、「紫女」、「見せぬ所は女大工」の三編は霊や化け物が登場するが、「忍び扇の長歌」と「闇の手がた」には登場しない。こうして怪異的なものとそうでないものが区別なく描かれているのも、『西鶴諸国はなし』の興味深

い特徴である。

しかし一編ずつに登場する女性の特徴に注目すれば、怪異の有無にかかわらず、女性の感情と行動が結びついて事件が起きていることがわかる。西鶴にとって重要だったのは怪異譚を描くことではなく、異様な事件の裏には必ず人間の感情があることを示すことだったのではないだろうか。

それを明らかにするために、仮名草子や同時期の西鶴作品などと『西鶴諸国はなし』の関わりを考えたい。

三―一、仮名草子『伽婢子』と『西鶴諸国はなし』

まず仮名草子について、西鶴が影響を受けたとされる『伽婢子』との関連はどうであろうか。『伽婢子』との比較は二章の「紫女」考察において既に行っているが、改めて整理を試みることにする。

二章一節で述べたように、「紫女」の典拠は『伽婢子』の「牡丹灯籠」およびその類話である。直接の典拠であると考えられる「牡丹灯籠」と、「紫女」を改めて比較すると、やはり最も大きな違いは主人公の人物像だろう。

「牡丹灯籠」の主人公荻原は、愛する妻を亡くしたばかりの孤独な男であった。本文にも「愛執の涙袖にあまり、恋慕のほのほむねをこがし、ひとりさびしき窓のもとに、ありし世の事共思ひつゞくるに、いとゞかなしさかぎりもなし」とあり、荻原の抱える寂しさの大きさが窺える。霊の弥子はその荻原の孤独につけ込んで関係を深めていった。もし荻原が未婚の男性であったなら、霊に憑かれることはなかっただろう。この話には、孤独を抱える人間のもろさが表されているのだ。

対して「紫女」の主人公伊織は、一人で生きることを選んだ遁世者であった。孤独を感じるところ

か、女性との関わりを断つことを信念としていたはずである。にもかかわらず、彼は紫女の色香に迷い、命の危機に瀕してしまった。この一編には、遁世者でさえも陥ってしまう女性の魅力の恐ろしさが描かれている。

つまり、「牡丹灯籠」が萩原という個人に訪れた脅威を描いたのに対し、「紫女」は誰にでもあり得る脅威を描いたのである。萩原は孤独という隙を霊に与えてしまったが、伊織には落ち度はなかった。「紫女」は、より無差別的な怪異の恐ろしさを表現しているのだ。

付け加えると、萩原は最後に命を落としたが、伊織は無事だったという点にも大きな違いがある。これは、「牡丹灯籠」が怪異の恐ろしさに主軸を置いているのに対し、「紫女」は生きる人間の感情や行動に注目していることの表れではないだろうか。生きた人間は怪異に絶対に抗えないわけではなく、その心の強さがあれば立ち向かえることを「紫女」は伝えている。したがって、どのような人間にも怪異の脅威は存在するが、感情を強く持てば立ち向かえるというメッセージが隠されているのである。

また『伽婢子』巻六の三「遊女宮木野」にも注目したい。夫の留守中に命を落とした女性の悲劇の物語で、『雨月物語』の「浅茅が宿」の典拠として知られる。この「遊女宮木野」において、宮木野が亡くなった場面を見ていきたい。

夫が不在の中で戦乱が激しくなり、宮木野の家に武田軍の兵が押し掛けた。軍兵たちは宮木野の美しさに惹かれて乱暴しようとするが、宮木野は自らの貞操を守るため、自分で首を括って死んだ。その宮木野の心意気は、作品中で立派なものだと評価されている。

『西鶴諸国はなし』の「闇の手がた」でも、女性が複数の男性に襲われる事件が起こった。この話では女は男たちの背中に鍋炭の手形をつけ、犯人であることを暴いた。同じような状況で、同じように女性の抵抗が描

かれるが、その方法の違いが興味深い。

宮木野が男たちに抵抗するために自分を犠牲にしたのに対し、「闇の手がた」の女は自分の命を守りつつ、男たちを死刑にすることに成功した。命より貞操を大事にした宮木野と、命を優先した女の間には、前提として中世的な価値観と近世的な価値観の違いが表れているだろう。それに加えて「闇の手がた」には、自分を犠牲にせず一矢報いるという女性のたくましさがある。これは女性の主体性であり、仮名草子にはあまり見られないものである。

したがって、『西鶴諸国はなし』は『伽婢子』に比べ、生きる人間の感情が大事にされており、また女性の主体性が意識して描かれているのである。この点から、『西鶴諸国はなし』は仮名草子『伽婢子』に影響を受けながらも、単なる怪異譚ではない、人間の感情とたくましさを引き起こす事件を描こうとしていると言えるだろう。

三―二、『好色五人女』と『西鶴諸国はなし』

次に、同時期の西鶴作品について考えてみたい。『西鶴諸国はなし』刊行の翌年、貞享三年（一六八六）に『好色五人女』と『好色一代女』が刊行されている。

『好色一代女』はある女性の一代記として書かれているが、その実は男性の目線から、様々な職業に就く当代女性の姿を見たものと捉えられる。その証に、『好色一代女』の冒頭は「美女は命を断つ斧と古人もいへり」という言葉である。一章三節で「闇の手がた」の同様の冒頭文について論じたように、この言葉は男性主体の目線から女性の脅威を語るものである。したがって『好色一代女』は男性主体の作品であり、『西鶴諸国はなし』

し』各話と大きな関連があるとは思われない。

では、『好色五人女』はどうかであろうか。先に述べたように本稿では、より女性の多様な感情を描いている点で『西鶴諸国はなし』を評価できると考えているが、一般的には『好色五人女』の方が知られている。『西鶴諸国はなし』にも「忍び扇の長歌」のように女性の恋の物語があるが、『好色五人女』ほど評価されていないのだ。この両者には、どのような違いがあるのだろうか。

『好色五人女』は実在した五人の女性の事件を描き、特に八百屋お七の物語は現代に語り継がれるほどに有名である。お七の物語である巻四「恋草からげし八百屋物語」と「忍び扇の長歌」を比較したとき、最も目につくのは描写の細かさである。

たとえば女性が男性に恋をした瞬間の描き方を比較する。「恋草からげし八百屋物語」では、吉三郎の指に刺さったとげを抜く際、離れがたく、「又返しにと跡をしたひ、其手を握りかへせば、是より互いの思い」となった、とある。言葉も満足に交わせない中、些細な出来事でお互いに惹かれるさまが丁寧に描かれ、読者も世界観に入り込めることだろう。

それに対し「忍び扇の長歌」では、男は姫を垣間見て美しさに惹かれて奉公するようになる。その後姫も男を思うようになるのだが、そのときの本文は「縁は不思議なり。あなたにもいつともなう、おぼしめし入れ」とあるだけである。姫が男に恋をした具体的な様子は描かれていないのだ。これでは読者がお七の恋に感じたような共感や同情は得られないであろう。それだけでなく、「恋草からげし八百屋物語」は五章にわたってお七と吉三郎の恋が描かれるのに対し、「忍び扇の長歌」は一章のみの短編である。同じ恋物語とはいっても、物語の深さや、読者が抱く同情の大きさは全く違うと言わざるを得ない。

では、『西鶴諸国はなし』は『好色五人女』に劣るのであろうか。私はそうは思わない。『西鶴諸国はなし』は『好色五人女』という傑作を生み出すのに不可欠の作品であったと考えている。

これまで見てきたように、『西鶴諸国はなし』には多様な感情を糧に大胆な行動に出る女性が描かれていた。この女性像は『好色五人女』に受け継がれ、より感情の部分を丁寧に描き出し、単なる奇談ではなく、読者が女性に共感できる物語に仕上げている。その裏付けとして「忍び扇の長歌」では、姫が死んだ恋人を思い出家したことについて何の言及もないのに対し、お七の死後は周辺に住む人や旅人までもが彼女を弔った様子が描かれている。『西鶴諸国はなし』は事件の顛末を書くことに終始していたが、『好色五人女』はそれをとりまく人々の感情までを作品に取り込んだのである。

『好色五人女』が人々の共感を呼ぶのは、西鶴がその直前に『西鶴諸国はなし』の各話で女性の主体性に意識を置き、様々な感情と事件を描いたからであろう。その土壌があったからこそ、画期的な女性主体の作品が生み出せたのである。したがって、『西鶴諸国はなし』を『好色五人女』より劣ると評価するのは適切でなく、『好色五人女』を生み出す過程に、女性を描くことの深化のきっかけとして『西鶴諸国はなし』があったと考えるべきである。

三―三、文学における女性史の中の『西鶴諸国はなし』

ここまで仮名草子である『伽婢子』と、直後の作品である『好色五人女』との比較を通し、『西鶴諸国はなし』の意義を探ってきた。西鶴は『西鶴諸国はなし』を書くにあたり、仮名草子の要素を残しつつ、怪異譚を書くことよりも事件の裏にある人間の感情を描くことを目指した。それによって描き出された女性の〈感情〉

を〈行動〉に変える力は、怪異譚でない『好色五人女』に受け継がれていく。したがって『西鶴諸国はなし』は、仮名草子を人間の感情の物語へと発展させ、その後の傑作と呼ばれる物語へと生かされる重要な作品である、と位置付けられる。

では、さらにその後の女性に関する文学はどのように変化していくのだろうか。元禄十六年（一七〇三）上演、近松門左衛門による『曾根崎心中』を例にとって考えてみたい。

『曾根崎心中』は、商家の手代である徳兵衛と遊女お初が義理と金の問題に葛藤し、共に心中をするという物語である。近松最初の世話浄瑠璃にして大成功をおさめ、以後の文学に大きな影響を与えた。この作品と、先の節でも見た「忍び扇の長歌」とを比較してみたい。

この二つの話は、いずれも困難な恋をする男女の物語である。それぞれの登場人物は、その恋にどう向き合ったのだろうか。

女性の行動の違いに注目したい。「忍び扇の長歌」の姫は男と共に暮らすために駆け落ちをし、その後男が処刑されると自分の正当性を主張し出家した。対して『曾根崎心中』のお初は、徳兵衛と共に死ぬことを選んだ。こうして比べると、「忍び扇の長歌」の姫が恋を妨げる障害に抵抗し自分の意思を貫いたのに対し、お初は障害に屈してしまったように思える。では、お初は仮名草子に登場する女性のように、主体性の見られない人物なのだろうか。

お初は悪役である九平次が徳兵衛を罵倒し、徳兵衛が死んだら自分がお初をかわいがってやろうと言った際、次のように返した。

わしとねんごろさあんすと、こなたも殺すが、合点か。徳様に離れて、片時も生きてゐようか。そこな九

平次のどうずりめ。阿保口をたゝいて、人が聞いても不審が立つ。

この言葉からは、お初の九平次への強い恨みの感情が感じられる。男性である九平次に対し「こなたも殺す」と誓し、「どうずりめ」と罵倒する様子は、仮名草子の女性とは一面を成しているだろう。お初はこの場で、軒下に隠れていた徳兵衛と死を約束する。したがってお初にとって死は、九平次に対する抵抗の証なのである。お初は九平次に屈して死んだのではなく、最後まで抵抗するために心中したので。

対して「忍び扇の長歌」の姫は自害を求められ、それに抵抗して出家をした。つまり形は違えど、両者は恋の障害に抵抗し、自分で自分の行く末を選んだのである。お初が単に徳兵衛に付き従うのではなく、自分の意思で九平次に抵抗し死を選ぶからこそ、観客の同情が得られる。したがってお初は、男性に翻弄されるばかりの女性ではなく、自分の意思を持った主体性のある女性として描かれているのだ。このように主体性があり、抵抗の〈感情〉から〈行動〉を起こすさまは、『西鶴諸国はなし』で描かれた女性像を引き継いでいるだろう。そのうえで、死という結末について簡単に言及しておきたい。『曾根崎心中』以後、心中話が流行することから、この頃の民衆は弱者が強者に勝ちきれず、悲しい末路を迎えることを美徳と感じていたように思う。対して「忍び扇の長歌」は武家の話であり、女性は死なないことから、民衆が共感できる弱者の物語ではなかった。つまり時代が進むと、悲劇はよりリアルで民衆の共感を得られるかたちへと変化しているのである。

その証に、先の節で扱った『好色五人女』のお七の物語は、西鶴の時代以降独自の変化を遂げた。『好色五人女』では、吉三郎が自分の名誉のために死のうとするも周りに止められるが、正徳四年（一七一四）頃上演されたと伝わる浄瑠璃「八百屋お七恋緋桜」では、吉三郎はお七の身代わりになることを願い、彼女に先立って切腹をする。愛し合う男女が死という同じ道を進むことが、当時の観客にとっては美しく、共感できる物

語だったのであろう。したがって文学史における女性は、『西鶴諸国はなし』で主体性と〈感情〉を〈行動〉に変える力を持った存在として描かれ、その後、より共感できるリアルな存在へと変化していったのである。改めて、先に考察した『伽婢子』、『好色五人女』との比較も合わせ、文学における女性史の中の『西鶴諸国はなし』の位置づけをしたい。繰り返しになるが『西鶴諸国はなし』は、仮名草子を人間の感情の物語へと発展させ、『好色五人女』などの傑作と呼ばれる物語へと生かされた作品である。またその後、近松門左衛門の『曾根崎心中』のような、女性の〈感情〉が強く描かれる悲劇へも影響を与えている。つまり『西鶴諸国はなし』は、近世文学における女性の主体性を引き出した重要な作品なのである。

四、女性を通して見た『西鶴諸国はなし』

女性を中心に『西鶴諸国はなし』を論じてきた。すると、西鶴が女性の持つ力に関心を寄せていたこと、また異様な事件の裏には必ず人間の感情があることを描こうとしたことが考察できた。

このことは、序文にも通じている。本稿のはじめに、序文の最後に登場する「四十一迄大振袖の女」について述べた。改めてこの女性について考えると、これまで論じてきた女性の力が、ここにも表れていることがわかる。

西鶴が序文において「四十一迄大振袖の女」を異様なものとしたのは、単にその格好がおかしいという意味ではない。その裏にある女性の感情を指して、「人はばけもの」と言ったのではないだろうか。女性が年齢にそぐわない格好をしたのには、何かしらの理由、つまり感情があったはずである。女性の姿を街中で見ただけ

ではその詳細はわからないが、だからこそ、彼女にどんな事情があり、感情があったのかを想像させられる。西鶴はその感情を想像したうえで、「人はばけもの」とした。つまり、人間は感情によって異様な行動をとってしまうことがある、という現実の恐ろしさや面白さを感じ、ならば世の中にはどんな事件もありうるという意味で、「世にないものはなし」としたのだろう。

したがって序文の最後、『西鶴諸国はなし』の全体を暗示するような文言に女性が登場するのは偶然ではなく、本稿で扱った五つの話に見られた女性の力に西鶴が感心を寄せていたことの表れなのである。西鶴の目に異様に映った「四十一迄大振袖の女」の背景に何かしらの感情があるように、各話の女性にも様々な感情があった。その感情をもとに、珍しく、ときとして恐ろしい事件が起きたのである。

『西鶴諸国はなし』はそれぞれの話の典拠やモチーフに一貫性がないが、こうした感情と行動の結びつきは、どの話にも共通するだろう。特に、それまで主体性のあるキャラクターとされてこなかった女性を、豊かな感情と主体性のある、ひとりひとりの人間として描いたことを評価したい。人が人間関係の中で様々な感情を抱いて驚くべき行動を起こしたとき、奇妙な事件は起こる。事件そのもの以上に、裏にある感情を描き出そうとする姿勢は、当時としては斬新なものだったに違いない。だからこそその後、女性を中心にした感情豊かな作品が生まれていくのである。『西鶴諸国はなし』に描かれる女性は、近世当時の女性の姿や、その後の文学中の女性の描かれ方の変化を象徴するものであった。

おわりに

『西鶴諸国はなし』は事件の裏にある人々の感情を描き、単なる怪異譚から一歩踏み出した作品であった。西鶴の描き出した、女性の〈感情〉を〈行動〉に変える力は、その後『好色五人女』をはじめとした作品に引き継がれていく。したがって本作は西鶴の人間への視座を養った、重要な作品なのである。

女性という視点を通して見ることで、『西鶴諸国はなし』の全体を俯瞰できたように思う。序文が示唆したように、この作品の中で女性は非常に重要であり、西鶴の創作意識を垣間見ることのできる存在であった。また考察の中で仮名草子や前後の作品の女性像を見ることで、男性主体の物語が当たり前だった古代から、様々な物語を通して変化が生まれていった様子が実感できたように思う。そしてその中でも、西鶴が女性の主体性を引き出したことは文学史において大きな分岐点であるだろう。

【注】

- (1) 井上敏幸 『西鶴諸国はなし』三題 『江戸時代文学誌』第七号、一九九〇年
- (2) 宮本祐規子 『水筋の抜け道』 試論 『日本女子大学大学院文学研究科紀要』十一巻、二〇〇五年
- (3) 大川信子 『西鶴諸国はなし』 試論——「水筋のぬけ道」をめぐって—— 『常葉国文』十九巻、一九九四年
- (4) 注二に同じ
- (5) 金井寅之助 『忍び扇の長歌』の背景 『文林』一号、一九六六年
- (6) 宗政五十緒 『西鶴と仏教説話』 『文学』三四巻四号、一九六六年
- (7) 井上敏幸氏が「矢都姫事件」に「中将姫譚」・「伊勢物語」を追加した（井上敏幸「忍び扇の長歌の方法」『国語と国文学』五十巻、一九七三年）ほか、岩田秀行氏が「矢都姫事件」・「竹芝寺縁起」に加え「山田白滝譚」を挙げている（岩田秀行「忍び扇の長歌」について 『跡見学園女子大学国文学科報』第十号、一〇八二年）。

- (8) 重友毅『近世文学史の諸問題』明治書院、一九六三年
- (9) 井上敏幸「忍び扇の長哥の方法」『国語と国文学』五十卷、一九七三年
- (10) 「忍び扇の長歌」が論じられるようになった当初は、近藤氏や暉峻氏によって、古い封建的なものに対する抵抗、恋愛の新しい価値観を示しているという考察が行われた（近藤忠義『西鶴』研究篇 日本評論社、一九三九年・暉峻康隆『西鶴 評論と研究 上』中央公論社、一九四八年）。
- (11) 堀切実『読みかえられる西鶴』ぺりかん社、二〇〇一年
- (12) 井上敏幸ほか校注 新日本古典文学大系『好色二代男 西鶴諸国ばなし 本朝二十不孝』岩波書店、一九九一年
- (13) 井上敏幸「紫女」の素材と方法『近世文芸』二十二号、一九七三年
- (14) 注一三に同じ
- (15) 後藤興善『古今著聞集』と西鶴の説話『西鶴研究』第二集 台湾三省堂、一九四二年
- (16) 江本裕『西鶴研究―小説編―』新典社、二〇〇五年
- (17) 宗政五十緒『西鶴の研究』未来社、一九六九年
- (18) 宮澤照恵『西鶴諸国はなし』の研究』和泉書院、二〇一五年

The Female Image in “Saikaku Shokokubanasi”

SAITO, Yuka

The main purpose of this article is to clarify how women are depicted in “Saikaku Shokokubanasi”. The work is a collection of mysterious novels published in 1685, written by Saikaku Ihara (1642–1693). There are several stories about women playing an active role in this work. Through them, this article considers how women are depicted.

In conclusion, the women in this work have the power to turn emotions into actions. For example, the protagonist named Hisa in Volume 2–3, “Mizusuji No Nukemiti”, held a grudge against her boss, because she hurt Hisa’s face. Then, she became a spirit and murdered her boss. She put the emotion of resentment into action. This is the power to turn emotions into actions. The same power is depicted in the other few episodes.

Also, Saikaku published “Koushoku Gonin Onna” in 1686. This work is a collection of women’s love stories and became very famous. This love story demonstrates the power of women like in “Saikaku Shokokubanasi”. He applied the way of depicting women that he gained from writing “Saikaku Shokokubanasi” to his next work. Therefore, “Saikaku Shokokubanasi” is an important novel that forms the basis of the famous stories after that. It also means that it is an important work in the history of Japanese women’s literature.

(令和二年度日本語日本文学専攻 博士前期課程修了)